

短編小説シリーズ

「人目のイイトワ」



酒井日香（下ユル子）

第一夜 【クレーマーのK U Z U】

プルルル…… ※注) 電話の音

ガチャ ※注) 電話に出た音

オペレーター

「お電話ありがとうございます。
ヌメリ食品工業お客様サービスセンターでございます」

クレーマー

「ちょっとヌメリ食品さん」

オペレーター

「はい」

クレーマー

「あのね、聞きたいことがあるんだけど」

オペレーター

「はい」

クレーマー

「お宅で出してるカップラーメンに
“特盛りメガ焼きそば”ってありますよねえ？」

オペレーター

「はい。ございます」

クレーマー

「あれ、オカシイでしょ？」

オペレーター

「え??」

クレーマー

「オカシイでしょ。うん。絶対にオカシイ」

オペレーター

「えーと。お味が、ということでしょうか、それとも容器とか……」

クレーマー

「いやいや。そんなんじゃないくてねえ、そもそもオカシイのよ。なんでこんな商品が消費者庁は黙認しているのかしら。食品表示法的にどうなのかしら」

オペレーター

「食品表示法?? 原材料表示でしたらあの……、弊社ではきちんと成分分析もしてございますので、お気になられるようでしたら、広報室のほうへお問い合わせを……」

クレーマー

「いえいえ。ですからね、そういうことじゃないんですよ。成分とか、そういうんじゃないくて、名前がオカシイって言うてるの。名前がウソじゃないのって」

オペレーター

「はあ……。大変申し訳ございませんお客様。いま一つおっしゃる内容がわかりかねるのですが……」

クレーマー

「だから、名前と実態がものすごーく違うでしょ!! あんたたち、これのことを“焼きそば”って。“焼きそば”だって言うてるのよ?!

虚偽表示でしょうどう考えたって。だって焼いてねえじゃん!! お湯でふやかしてるだけじゃん!! これのどこが“焼きそば”なんですか。説明してくださいよ」

オペレーター

「あー……」 ※注) 頷き、電話の向こうでポンと膝を打つ。

クレーマー

「だからね、これね、“焼きそば”って言い切っちゃダメでしょ? だって焼いてないもん。熱湯かけてふやかしたところに、ソースで味付けしてるだけじゃん。だから正確には“特盛りメガ焼きそば味の煮そば”とか、“特盛りメガお湯をかけてふやかしてからソース味をからめるそば”って言わなきゃ、虚偽表示だよ。ダメだよ」

オペレーター

「うーん……。どーなんでしょ」

クレーマー

「どーなんでしょってえ？ どーなんでしょもこーなんでしょもないでしょ。
現に焼いてないじゃない。お湯かけてるだけじゃない。それともあんたの田舎では、
この作り方のことを“焼く”とでも言うのかしら？」

オペレーター

「うーん……。そうおっしゃられましても……。他社さんも似たようなカップ焼きそば
出してるじゃないですか。ウチだけじゃないですよ。カップラーメンで焼きそば出してるの」

クレーマー

「もちろんよ。その辺はちゃんと別働隊が動いてるわ」

オペレーター

「べ、別働隊?!」

クレーマー

「そうよ。我々は“カップ焼きそばの名称が不適當であることを消費者庁に
認めさせる夫人連合会”です。とにかく、あなたがたの商品名称は間違ってます。
我々は市民団体として、こんな現状を黙認するわけにいきません」

オペレーター

「黙認できないとどうなるわけですか」

クレーマー

「国を動かすことになりましようねえ」

※電話の向こうで、PC内の時計を見るオペレーター。

オペレーター

「あーそうか。今日はこの時間、水戸黄門やってないのか」

クレーマー

「そうなの。相棒もやってないよ」

オペレーター

「そういえば今、国王夫妻が来日中でテレビは全部それですもんね」

(完)

第二夜 【同窓会のK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第二夜 【同窓会のK U Z U】

.....

※注) ここはとある宴会場。宴もたけなわ、50～60代くらいの男女が数十名歓談中。

男A

「もう9時か……。そろそろ二次会にしないか」

男B

「そうだな。おい、源ちゃん幹事だろ。そろそろ締めの言葉頼むわ」

男C

「マイクは？」

男D

「マイクなんかいいよマイクなんか」

男B

「何言ってんだ、挨拶にはマイク要るだろ」

※注) マイクが回ってくる。

男B

「あー、あー……。あー?? 」

女A

「やだー、木村君歌ってよー」

男B

「あ、いや、違うんだ。マイクの確認してただけなんだよ。そろそろ貸切時間も終わりだから、あとは二次会ね。最後に幹事の源ちゃんから締めの一言を……」

※注) そういつて男Eにマイクを渡す男B。こいつが源ちゃんか??

男E

「あー、あー……。

ではみなさん。本日は45回目を迎えました、静岡県立甘栗高校第51期生の、同窓会の集いをお開きにしたいと思います。卒業時、18歳の湊垂れ小僧、小娘だった我々も、気づけばすでに還暦間際。恩師の山田先生に置かれましては先年他界され、月日の経つのは本当に早いものです。皆さんの中にはすでに定年を迎えたとか、間もなく定年だという人もいるでしょう。

そこで今回はお開きの前に、みなさんに今後の夢を語っていただきたいと思います。

18歳のころの、あの、夢と希望ではちきれそうだった頃の気持ちで、みなさんのこれからの夢を発表してください。発表が終わったらマイクをどンドン回して。

ではさっそく、榎さんから」

女A

「えー……?? 夢かあ～……。恥ずかしいわねえ……。そうだなあ、

私はこれからは、海外旅行にたくさん行きたいわ。子どもたちもみんな独立したし、これからはのんびりしたいわね」

女B

「私は趣味の陶芸と、パッチワークを頑張ります。キャッ♡」

女C

「私は英会話。娘がオーストラリアに住んでるの」

男F

「俺は孫の結婚式まで元気であることだなあ。あと、40代で始めたマラソンを頑張って、東京マラソンに出場してみたいな」

男G

「俺はまだまだ働かせて欲しい。関連の子会社の役員でもいいや」

男H

「何言ってるんだいこの不景気に……。シンちゃんは昔から高望みなんだよ。60超えたオッサンを役員にしたところで、ボロボロにこきつかって放り出すだけだぞ」

男I

「高岡、鈴木がうらやましいんだろ。お前婿養子だから」

男H

「なっ！！ なにをっ！！ 今に見ておれ！！ そんなこと言うなら
いつか市会議員に立候補して、お前らの毛嫌いするゴミ処理工場を
長砂美森に誘致してやるかな！！」

男I

「お～、立候補してみろや。 絶対テメエには票入れねえ！！」

男H

「なっ、なにおう～？！ このハゲ！！」

女D

「ちょっ……、ちょっとやめてよあんたたち。マイク回すから貸して」
※注) そう言ってさりげなくマイクを自分以外に流そうとする女D。

男J

「あ～、仲裁するふりして美穂ちゃんが話さないのはダメだよ。
美穂ちゃんの夢を発表しろよ」

女D

「あ、あたしは別にいいのよ。夢とか特にないし」

男I

「ダメだよそんなの。発表しろよ」

女D

「わ、私は本当に夢なんかないのよ！！ 私はとにかくいいのっ！！」
※注) そういって強引に次の人にマイクを回す女D。

女E

「だめだよ～！！ 全員発表する決まりでしょ～??
美穂ちゃんだけ話さないのってズルい～！！」

女F

「そうだよ～、ズルいズルーい！！」

女G

「ズ・ル・い、ズ・ル・い、ズ・ル・い！！」

女D

「……………」

※注) 女Dに対してズルいコール連発。 引っ込みがつかなくなる女D。

女D

「……だ、だって……。発表したらみんな笑うから……」

女E

「笑わないよ。夢があるって素晴らしいことでしょ？

夢のない世の中だからこそ夢を持たなきゃいけないのよ人は」

女D

「ほ……、本当に笑わない……??」

一同

「うんうん。絶対笑わない」

女D

「わ、わかったわ……。私は本当は……」

一同

「うんうん」

女D

「本当は……」

一同

「うんうん！！」

女D

「じよ、

「女優に……なり……たいの……」

一同

「あっ……」

「あつ……、うん……、べ、別に いいんじゃ ない かな……」

(完)

第三夜 【タクシーのK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第三夜 【タクシーのK U Z U】

四年間付き合っていた彼に今日、別れを切り出されました。

結婚するんだって。

相手は病弱で、頼りなくて、僕が守ってあげなきゃダメなんだって。

あかねはしっかりしてるし、強い子だから大丈夫だよなって。

あたしだって好きで強いわけじゃないわ。

そう思ったらなんだか泣けてきちゃって――。あたしは健二と別れたあと、
一人べろべろになるまで飲んだ。誰でもいい、このままあたしをめちゃくちゃにして――。

そう思ったの。

だけど声をかけてくれる人はいない。オシャレなショットバーでスクリュードライバーを
何杯も飲んだら、けっこうな金額になっちゃった。そのうち雨も降ってきた。明日は土曜日で
会社は休みだけど、なんだか今日は本当にツイてないなあ――。

あたしはふらふらと店を出て、雨に濡れるまま街をさまよった。健二の面影が胸にちらついて、
雨粒よりも暖かい滴が、頬を伝うのを感じていた。もう電車も終わりね……。今夜はどうし
ようか……。

このままホテルに泊まるか、家に帰るか……。

謎の男

「ちょっとそこのお嬢さん」

男に呼び止められて振り返ると、一台のタクシーが停まっていた。

気が付けばそこは、渋谷駅のタクシーロータリー。男はタクシードライバーの制服を着た中年

男だった。

謎の男

「ずいぶん悲しそうな顔をなすってますね。失恋でもなさいましたか」

あかね

「どうしてわかるの！」

謎の男

「実は自分、タクシードライバーなんですけど、占いの勉強もしてまして。道行く人を見ていたら、あなたに失恋の相が浮かんでたものですから」

あかね

「面白そう。運転手さんの車で送っててもらおうかしら……。あなたの車に乗ったら、私のこと占ってくれる？」

運転手

「もちろんです」

あかね

「わかった。乗るわ。家は登戸なの。とりあえず世田谷通りへ……」

運転手

「ちょっと待ってください。今、占いますから」

あかね

「そこから占うの?!」

運転手

「もちろんです。いついかなるときも占いで決めます。だからこんな、紫色の五芒星が描かれたタロット用のクロスとか、常に持ち歩いています」

あかね

「香典袋かと思った……。運転席でタロットってやりづらくない？」

運転手

「大丈夫です。これも修行です。うーん、ワンドの5、ペンタクルの4、正義の逆、

カップのクィーンか……。困ったな……。世田谷通りに抜けるのはどうかと占ったところ、ペンタクルの5、審判の逆位置が出ちゃいました……。世田谷通り、今夜はかんばしくありません」

あかね

「なら、どこがいいの」

運転手

「明治通りだと、節制の正位置、運命の輪の正位置、ソードの6で絶好調なんですけど……。どうでしょうお客さん。今夜はあえて、明治通りから川崎方面に向かってみませんか」

あかね

「方向が逆な気もするけど……。いいわ。占い通りにすれば、開運するかもしれないんだもんね」

運転手

「いいえお客さん。開運するかも、なんてありません」

あかね

「え？」

運転手

「間違いなく開運するんです。占いを活用しさえすれば」

あかね

「……そ……。そうね！！ うん、ぜったいそうよ！！ 幸せになれるのよ！！」

運転手

「レッツゴー！！」

あかね

「イエーイ！！」

※注) しばらくして交差点で信号待ち。

あかね

「運転手さんどうしたの」

運転手

「しっ！！ 話しかけないで！！ ケルト十字法で占ってるんですっ！！
.....えーと。ワンドのエース逆位置に吊るし人の正位置か.....。くっそう、
出たらダメだっ！！」

あかね

「ええ〜??」

運転手

「やむを得ない.....。井の頭通りを行きましょう。井の頭通りなら
カップのエース正位置、力の正位置が出てますから無難です」

あかね

「井の頭通り.....。登戸からますます離れるような.....」

運転手

「だめだったらダメなんです。だって吊るし人出ちゃってるんですよ環七通りは。
これ以上まだ、辛い恋がしたいんですか。このまま井の頭通りを北上します」

あかね

「わかった。任せるわ」

※注）再び交差点で信号待ち。

あかね

「また占うの?? このまま調布に出て川崎街道に行けば.....」

運転手

「いや、ダメだ。川崎街道はペンタクルの5、ソードの9、魔術師の逆位置で、
おカネに困る暗示です。.....川崎街道がダメ、鶴川街道もダメ、世田谷通りに
戻るのもダメ.....。どこか.....。どこかに世界のカードでも出てくれれば.....」

あかね

「運転手さん頑張ってよ！！ あたしの幸せのために頑張ってよ！！ 頑張って
恋人の正位置とか、世界の正位置とか、太陽の正位置を出してよ！！」

運転手

「待ってください……。ケルト十字法では限界か……。ならば、
ホロスコープスプレッドかもしくは、ヘキサグラム法ではどうだ……。??」

あかね

「運転手さん……」

運転手

「……………」

※それから1時間後

運転手

「やった！！ やりましたよお客さん！！ ついに成功と成就を告げる
最高にいいカード、“太陽”と“世界”が同時に出ましたよ！！」

あかね

「やった！！ やったわ！！ あたしはこれで幸せになれるのね！！
……で、そのルートは……」

運転手

「関越自動車道です」

あかね

「か、関越自動車道！！」

運転手

「はい。カードが告げる、必ずハッピーになれる道路は……。関越自動車道です」

あかね

「行くしかないのね」

運転手

「ですね」

あかね

「わかった。行きましょう、関越自動車道へ！！」

運転手

「そう来なくっちゃ」

※注) 走ること4時間。

あかね

「渋谷から登戸に帰りたかっただけなのに、なぜか日本海に来ちゃったわ」

運転手

「ですね」

あかね

「ここが占いで示された、私の幸せが待つ場所……」

運転手

「ですね」

あかね

「なんにもない……。荒れ狂う日本海の怒涛しか見えない」

運転手

「ですね」

あかね

「本当に、この土地で運命の出会いが……？」

運転手

「あ、言っておきますけどタロット占いの有効期限は3か月です。
3か月したらこの占いは無効になります」

あかね

「……運転手さん」

運転手

「はい」

あかね

「タロット占ってクソですね」

運転手

「ですね」

(完)

第四夜 【自己主張のK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第四夜 【自己主張のK U Z U】

キャスト

司会 宮本照夫

ナレーター 小宮良子

ゲスト 民人党議員 藤原始

生活保護受給者のA子さん（41歳）

他、番組スタッフ&観覧者

.....

宮本

「さて、今夜の朝まで大討論テレビ、“どうなる?!急増する生活保護受給者!!”
ということで、スタジオにお集まりの皆さんからも手が挙がっています.....、はい、16番鈴木
さんどうぞ」

※注) カメラアングル切り替わり、スタジオ前方の雑壇に並ぶ観客を映す。

鈴木

「生活保護受給者の方すべてが悪いとは思いませんが、やはり何の労働もしないで
おカネをもらう制度であるというのは不公平です。体が不自由なら不自由なりに、
手作業をするとか、ボランティアをするとか出来るはずじゃないかと思うのですが.....。
僕は、何もしないで給付金だけもらう人がいるというのが、ちょっと納得いきません」

宮本

「うんうん。生活保護受給者の方でどうしても働けない人には、その人がやれる範囲の
軽作業を課すということですね。確かに、もうどうしても働けない方が社会参加するということ
では、
そういう工夫も必要だったりするのかも知れませんか.....。おおっと、また手が挙がりました。
では31番、長谷川さんどうぞ」

長谷川

「母子家庭や扶養者を抱えている人の場合、生活保護の受給額は最高で、月額15万円程度になる場合もありますよね。私は事務の仕事をしてますが、1日7時間働いていてもお給料は手取りで9万円から10万円くらいです。そう考えると生保ってズルいなという思いは、どうしても持ってしまうんですけど」

宮本

「……なるほど。そういうご意見ですか。厚生労働大臣経験者で、年金制度改革にも携わったご経験のある民人党議員の藤原さん。藤原さんはどのようにお考えでいらっしゃいますか」

藤原

「そうですね……。生保の問題が非常にデリケートな部分を含んでいるのは間違いありませんね。
。いたずらに受給者の方を偏見で見る世の中であってはいけません。制度改革は制度改革として検討するとして、やはり一刻も早く、健康な方は生保を抜けられるような社会インフラを作るのが最優先事項ではないかと。雇用の促進などもしていかなければならないですね」

宮本

「なるほど。確かにここ最近、生活保護の方への見る目は、きつくなってきているかも知れません。
ではここで、ちょっとVTRに行きましょう。実際に生活保護を受けながら、母子家庭でお子さんを育てていらっしゃるA子さんに、スタッフが直接インタビューしたVTRです。ではどうぞ」

※注) テレビ画像が、討論のスタジオからVTRに切り替わる。

ナレーター

「ここは、東京都F市の都営アパート。2DKの間取りですが家賃は1万2千円です。
ここに暮らすA子さん(仮名・41歳)は7年前、夫と離婚。心身を患い統合失調症と診断されました。
それ以来、生活保護の受給を受け、小学4年生の一人娘を育てています」

※注) 急にモザイクのかかった映像。音声も加工された女性の登場

A子

「なんかこう……、辛いんですよねえ～……」

※注) ソプラノガスを吸ったような声

ナレーター

「そう語るA子さん。今も5種類の抗精神薬を服用しています」

A子

「辛いんですよすごく……。外とか出ると、人の視線が怖いっていうか……。あたしが生保だって思って、みんな噂してるんじゃないかとかあ……。あたしもたくさんハロワ行ったりしてるんですけどお～……。生保って知られただけで担当者の人からあからさまに取らないよって言われたりとかあ～……」

ナレーター

「A子さんは最近、テレビやニュースで生活保護の問題が流れていると、不安でパニック発作が起こることもあるといいます。言われのない差別と偏見に苦しんでいます。そんなA子さんの1日を追いました」

※AM7:00

娘は一人起きだし、トーストを焼いている。A子まだ布団の中。

A子

「そうですねえ～……。朝起きられないんですよお～……。だから娘は毎朝、自分で朝ごはんを作ってますね」

スタッフ

「それは薬のせい？」

A子

「うーん、薬のせいかも知れないですけど、寝たの朝5時ですから」

スタッフ

「朝の5時??」

A子

「そうなんですよお～……。いつまでも生保ってやっぱり、不安じゃないですかあ～……。」

だから、アフィリとかブログパーツで少しでも稼ごうと思っちゃってえ～……。

結局朝の5時までネットですね」

ナレーター

「5時に寝たA子さん。その後起きたのは午後1時。起きるとインスタントコーヒーを飲みながらカップラーメンを食べ、すぐにパソコンに向かいました。

傍らにはお気に入りのタバコ。タバコは1日2箱吸います」

スタッフ

「何してるんですか」

A子

「ネットゲームですね。ギルドで友達が待ってるんですよお～……。その子も生保でえ～……」

ナレーター

「そう言って、寢床でそのままパソコンに向かうA子さん。

辺りには衣類やお菓子の袋、灰皿、食器などが散乱したままです」

スタッフ

「掃除とか洗濯とか、しないんですか」

A子

「あー……。たまにやりますよたまに……。娘がやってくれたりとかも……」

ナレーター

「そう言いながらもパソコンに向かい続けるA子さん。3時間ほどネットゲームに興じると今度は、掲示板2ちゃんねるを覗きます」

スタッフ

「何してるんですか」

A子

「2ちゃんですね。毎日訪問してるスレッドがあってえ～……。そこに悪口とか、根も葉もない噂とか自作自演で自分のブログの宣伝とか書き込むとお～……、

ちょっとスカッとするんですよえ～……」

スタッフ

「娘さん、そろそろ学校から帰ってきますよ。おやつとか夕食の準備とか、しなくていいんですか」

A子

「ちょっと今日は体の調子悪くて……。大丈夫です。娘が自分でやりますから」

スタッフ

「……………」

ナレーター

「その後、娘が帰宅しても知らん顔でネットをし続けるA子さん。ハローワークのホームページを見に行くわけでもなく、夕方になると今度は、自分のブログの記事作りです」

※注) 画面の中に、A子作のブログが映る。ちなみにアメーバ。

【今日はMHKの人が取材に来てる。生保の特集だって。鬱……。あたしってそんなにダメ人間かなあ〜】

ナレーター

「もともと感受性が人一倍強く、繊細だったA子さんは学生時代から、小説家志望でした。書くことはまったく苦になりません。自身のブログにも1日に3回も4回も原稿をアップしています。ブログはここ10年、1日も欠かしたことがありません。娘のチエミちゃん（仮名）は、そんなお母さんのネット生活をどう見ているのでしょうか」

娘

「うーん……。正直、ブログなんかやめて欲しい」

A子

「なんで」

娘

「バカじゃないの」

A子

「バカじゃないよ。ブログは毎日更新しないと、すぐにダメになっちゃうんだよ」

娘

「そういうのキモい。それがおカネになるんならともかく……。
毎日誰に義理立てして書いてんの？ お母さんのブログなんか別に、誰も気にしてないよ」

A子

「そんなことないよ。これでも見てくれてる人はいるんだよ」

娘

「だからそーゆうのがキモい。バカだと思う」

A子

「そうかなあ～……」

ナレーター

「結局この日、A子さんがパソコンに向かい続けた時間はなんと、15時間にも及びました。
眠っている時間と、トイレやお風呂以外はずっとパソコンの前にいました」

スタッフ

「毎日こういう生活なんですか」

A子

「いいや、役所の人来的时候と、週3日の通院のときは外出したりもしますけど……。
しょうがないじゃないですかあ～……。世間の偏見とか視線とか差別が怖いから、
外に出られないんですよあ～……。パソコンだけが外とつながる手段なんですう～……」

スタッフ

「ネットが社会そのものってこと？」

A子

「うん。そんな感じかな」

スタッフ

「A子さんの今後の夢ってなんですか」

A子

「そうですねえ～……。自分のブログを1日1万PVくらい取れるような人気ブログに育てて

え～……。

ブログが書籍化されてえ～……。それがミリオン売れちゃってくればあたしも、生保から抜けられるしい～……。娘にもいい暮らしをさせてやれると思うんですけどお～……」

スタッフ

「はあ……」

A子

「んで、本がミリオン行ったらトーク番組にゲストで呼ばれちゃってえ～……。んで案外“A子ちゃんってトークもイけるね！”って話になってえ～……。芸能事務所の人が契約しに来ちゃってえ～……。そこから最終的には女優への道が開けたらなって思ってますけど」

スタッフ

「そうしたら生保から抜けられるのに、と」

A子

「そうです。だからあたしはあたしなりに、就職活動してます。ブログをひたすら書いて、ネットで自作自演の書き込みをすることが、果てないあたしの就職への努力なんです」

スタッフ

「……最後に、このVTRをスタジオで見ている皆さんに、メッセージをお願いします」

A子

「生保の人たちだってみんな、あたしみたいに必死で努力してるんです。どうか私たちを偏見の目で見ないでください。人権を尊重してください。差別とか、バカにしたりとか、そういうのは絶対にやめてください」

※注) カメラ、スタジオ内に切り替わる。

一同

「む……」

「無理だあああああああああ
!!!!!!!」

(完)

第五夜 【置物のK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第五夜 【置物のK U Z U】

キャスト

大谷慎也（宗教学者）

小林美也子（スナックのママ）

.....

東京・調布市にある天台宗寺院「深大寺」はなんと、浅草寺と並ぶほど古い寺院で、もともとは水神様をお祀りしていた場所なんだそうである。歴史はおよそ1300年ほどさかのぼることが出来るらしい。比叡山に天台宗総本山・延暦寺が建てられたのは1200年くらい前だから、それよりもずっと前からある寺院ということになる。

今日はその深大寺で「だるま市」があるらしい。行きつけのスナックのママ美也子から、どんなだるまを買ったらいいのか宗教学者としてアドバイスしてくれと頼まれたので、私は深大寺そばをごちそうしてくれるのを条件に、美也子につきあって深大寺を訪れた。

店先を歩いていると、実にさまざまのだるまが売られている。昔はだるまと言えば赤い色と相場が

決まっていたが、今は色も赤・白・黄色に、ミントグリーン、ライトブルー、パステルピンクやパステルパープル、金色、銀色まであり、だるまのカラーによって効能が違うらしい。

美也子

「いろんなだるまがあるのねえ〜……」

慎也

「ホントだ。ここまでカラフルにされちゃうと、風情も何もないな」

店先に並んだ色とりどりのだるまを眺めていたら、背後から黄色い歓声が上がった。制服を着た女子高生のグループである。何を騒いでいるのかと思ったら、隣の店になんと、ハート型の色とりどりのだるまが売られているではないか。女子高生たちはそれらを手に取り、「かわいくね?」「ヤバくね?」とはしゃいでいたのである。私はその店にひきつけられた。

慎也

「この子たちはだるまの置物のモデルとなった達磨大師とその弟子・慧可の壮絶な話を知っているのかな……」

美也子

「なにそれ」

私はおしりみたいな形をして、ウインクまでさせられているピンクのミニだるまを手に取りながら、美也子に達磨大師とその弟子・慧可の壮絶な出会いを話してやった。

6世紀頃、南インドから中国に渡ってきた菩提達磨は、梁の武帝に招かれて
禅問答をするのだが、仏道修行すれば現世の功德が得られると思込んでいた武帝は、
そうではないと答える達磨を理解できず、二人は決別した。

その後菩提達磨は、洛陽のはずれにある嵩山少林寺で、壁に向かって座禅すること9年。
ついに悟りを開き、日本と中国における禅宗の開祖となったわけだが、その間に手足が
腐って落ちてしまい、その姿が今日の縁起物「だるま」になったと言われている。

美也子

「その話はなんとなく聞いたことがあるけど」

慎也

「いや、この面壁9年の修行中に、達磨大師の元に神光という沙門が訪ねてくるんだよ。
この神光こそ、のちの慧可大師なんだけど」

時は極寒の2月――。

嵩山少林寺にも深々と雪が降り積もる。深い雪をかき分け、険しい崖をものともせずの上って
くる沙門、神光。岩屋の中で何年も誰とも口を利かず、座禅し続けている菩提達磨に自分の心の
苦しみを救って欲しい――。

慎也

「その一心で神光は訪ねてきたわけだけど、菩提達磨はこの世の名誉栄達とか、
功名心とか、権力欲とかに染まらない人だったので、高名な自分に弟子入りして
箔をつけたいというような輩はことごとく無視した。最初は神光も、その手のたぐいの
人間だろうと思って、菩提達磨は無視し続けたんだね。ところがあるとき――」

※注) ここより回想シーン

.....

神光

「菩提達磨さま、どうぞお願いでございます！ わたくしのこの、
焼け付くような苦しい心をお救いください！！」

達磨

「.....」

神光

「どうかどうか.....。どんなに仏典を読んでも、修行をしても、死の恐怖や
生きているむなしさから救われないのでございます.....。お悟りになられた

達磨様なればこそ、この生死の苦しき迷いの世界から、きっとわたくしに光を与えてくださるはず……。そう思って、何もかも捨てて少林寺へ登ってまいりました。どうか一言だけでも、道理をお示しく下さいませ！！この通りでございます！！」

達磨

「……………」

神光

「こ、こんなに頼んでも答えてはくださらぬのですか……。ならば……」

神光、急に懐から短刀を取り出すと、齒を食いしばって自分の左腕に刃をつきたて、気合とともに左腕を切り落としてみせる。

神光

「こ……！！ これでも達磨様は、わたくしが野心のためにあなた様に近づいたと思われるのでございますか！！」

達磨

「……そなた、神光、と申したな……」

神光

「はいっ……！！」

達磨

「そなた、心が苦しいと申すか」

神光

「はい。生死の迷いの中から、抜け出せないでございます」

達磨

「ならば、その苦しいという心を、ここへ出してみせよ」

神光

「は……っ……！！」

達磨

「そう……。心を取り出してみせることは出来ぬ。苦しみは己が勝手に作り出しているだけのこと。一切皆空。“我が心”などというものなど本来存在しない。すべてはあるがままにあるだけのことよ」

.....
.

慎也

「このとき神光は、にわかに大悟したと伝えられている。そして禅宗の第二祖、慧可大師となったんだけどね……。もしもタイムマシンがあったらさあ」

美也子

「タイムマシンがあったら？」

慎也

「菩提達磨と慧可大師に、あんたたちそんなことやってるけど、
1500年後の日本では女子高生にハート型にされた挙句、
ピンクに塗られちゃってますよって教えてあげたいよね」

美也子

「教えたらどうなるかしら」

慎也

「泣くだらうね達磨」

(完)

フラフラと立ち寄ったコンビニでとある本をみつけた。

「こだわりを捨て去る本」

というタイトルだ。今流行の安価な生き方文庫本シリーズである。

今の俺の悩みに付け込むように、タイトルが誘惑してくる。俺はカップラーメンと菓子パンを買うついでにその本を買った。

なんでも著者は仏教における「空」を体得し、すべてにとらわれのない心で生きることこそが真の幸せであると説いている。なかなか共感できる本だった。

巻末に著者のブログが紹介されていたので、カップラーメンを啜りながら俺は覗いてみた。

「こだわりを捨てて生きていくことこそ、真の幸福である」

「こだわる人の心は生き地獄である。こだわらなければ運は向こうからやってくる」

男A

「なるほどな……。確かに失業中の俺も、こういう仕事じゃなきゃって自分の理想にこだわりすぎているから、人生が拓けないのかも知れない」

俺はこの著者さんのブログをくまなく見た。

この人はこのような形で著書が出たのは初めてであるらしく、ブログのあちこちにアマゾンへのリンクとか、本がこれだけ売れたとかが貼り付けてある。ブログの読者数なんかも貼り付けてあるし、何よりもブログの更新回数が気になるくらい多い。毎日3回更新で、それを足かけ6年間やっているとのことで、それをまた自分で「継続させてきたからこそ、私は本を出せたのです。諦めないことが肝心です」みたいに書いている部分もある。

それを眺めてさて困った。俺は独り暮らしの六畳一間にごろりと身を投げ出した。するとコンコンと、誰かが玄関をノックした。俺はかったるいので寝そべったまま「開いてるよ～」と声を上げる。

男B

「よおもっちゃん。仕事クビになったんだってな」

男A

「まあな。汚いけど座れよ」

訪ねて来たのはバイト仲間のノリくんだった。

ノリくんはお土産にコンビニ袋を提げていた。

中からキンキンに冷えたガリガリ君を取り出し、俺にプレゼントしてくれた。

男B

「あー、パソコンじゃねえか珍しい。ハロワの職業検索でもしてたんか」

男A

「いや……、違うんだ。こんな本をうっかり買っちゃったんだけど、その著者さんのブログを見てたんだよ」

男B

「こだわりを捨て去る本……？ 最近このテの文庫本がやたらとコンビニに並んでるよねえ……。
それだけ病んだ人が多いんだろうね」

男A

「んでさ、それ読んで悩んじゃったんだよ」

男B

「悩んじゃったって何さ」

男A

「いや……、この人はこだわりを捨てるっていうのを、人生の中での一つの柱にしてるみたいなんだけど……。こうしてブログで自著の宣伝してさあ、売上自慢みたいなこと書いて、
ブログも毎日1日も休まず書いてるのは、おもいっきり本人こだわりまくってんじゃねえかよって」

男B

「それで本の内容が信用できなくなっちゃったわけね」

男A

「うん」

男B

「社会の矛盾ってやつだな」

男A

「このやるせなさをどう解消したらいいんだ」

男B

「本に限らず、大衆に訴えることって矛盾してるよね」

男A

「どういうことだノリくん」

男B

「たとえば“謙虚に生きましょう”っていう理想を素晴らしいと思ったとして、大勢の人にわかってもらいたいと思ったとするだろ？」

男A

「うん」

男B

「でも大勢の人に訴えようとする、結局は自己顕示ってことになっちゃってさあ、“謙虚”とはまるで正反対の本人の人生になっちゃうわけだよ」

男A

「確かにな」

男B

「あらゆるコマーシャルイズムはそうなんだ。“この商品はいい商品なんです”ってことをみんな宣伝するんだけど、そもそも“いい商品”なんだったらなぜ宣伝などする必要があるんだってことじゃねえか。宣伝・広告なんていう概念自体がすでに自己矛盾なんだよ。それを世間の連中はありがたがって、テレビに出てる人間を一段上の特別な人間って思ったり、メディアに出ることがすごいことだという風潮が成り立ってる」

男A

「だとすると、俺がこの本と著者の矛盾した心を、どうにかして世間に訴えたいと思ってアマゾンとかに酷評レビューを書きこんだらさあ……」

男B

「それも結局はウェブという“人目”にさらして、大勢の人間の共感が欲しいというエゴ丸出しの、あさましい行為ということになるな」

男A

「……ってことはさあノリくん」

男B

「うん」

男A

「本当に謙虚な人っていうのは腹が立っても、思うことがあっても、政治に一過言あっても誰にも言わないし、くそつまんねえ本を読んじやっても黙ってやり過ごすことができる人間ってことか」

男B

「そうだよ。それが究極の美しい人生だ」

男A

「ましてや作家になりたいなんていうヤツは、あさましさの塊ってこと??」

男B

「当たり前じゃないか」

男A

「んじゃあブログやってるヤツっていうのは」

男B

「もうお話にならない」

男A

「ノリくんの論理でいくと当然そうなるよね……。はあ……」

男B

「まさか、やりたいのかもっちゃん、ブログを」

男A

「うん。それで人気ブログになって話題になって、そのまま作家デビューできないかなって甘いこと考えてる」

男B

「そうしたら今の失業状態なんて、一気に解消されるのに、と」

男A

「うん。世の中は今、そういうこと考えてる人間が何人居るんだろうか」

男B

「少なくとも1000万人はいるだろうね」

男A

「1000万人……、その心は」

男B

「アメーバの会員数」

男A

「1000万人かぁ～……。そーゆーのが全員、ホントはあくせく働きたくなくて、自己顕示欲の塊で、ともすれば自分が有名人になってカネ儲けまでしたいと考えてるってことか」

男B

「そう見て間違いないだろうと思う」

男A

「そんな人間ばかりになっちゃったら……」

男B

「日本の産業、滅びるだろうね」

男A

「んじゃあ、それを一刻も早く人類に警告しなくちゃならないじゃないか」

男B

「そのためにまず、何をすべきだもっちゃん」

男A

「アメーバブログに会員登録」

男B

「違う。ハローワークに行くこと」

男A

「え———???????

つまんなーい!!!」

(完)

第七夜 【女同士のK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第七夜 【女同士のK U Z U】

突然ですが今日は、
女の子同士のえげつない会話をお楽しみください。

全員高校1年生。

.....

かおり

「どうしたの花沢さん。話したいことがあるって.....」

花沢

「うん.....、カツヲくんのことなんだけど.....」

早川

「花沢さん、カツヲくんと付き合ってるんじゃないっけ」

花沢

「そうなの.....。でも実は最近、それで悩んでるんだ」

早川

「どういうこと？」

花沢

「実はね.....、カツヲくんとこの間、うちの部屋で期末テストの勉強したんだけど.....。
そのとき、親がいなかったから押し倒されちゃったの」

早川

「えー?? もしかして花沢さん.....、カツヲくんとヤっちゃったの??」

花沢

「せ、先生とか、親とかには絶対に言わないでっ!!」

早川

「ど……、どうだった?? すんごく痛かった?? やっぱり……」

花沢

「わかんない……。カツヲくんも初めてだったみたいで、これがそうなの??
これがそうなの?? って、あたし、最中にずっと思ってたわ」

かおり

「それで悩みって……」

花沢

「うん。そのときにね、血が出なかったんだけど……。それってやっぱり問題あるよね?
カツヲくんに、花沢さん処女じゃないんだって何回も言われてさ……」

かおり

「そんなのエルティーン洗脳だよ～！ 血が出るのって、よっぽど濡れてないときだっつう話だよ。

カツヲが案外上手かったか、あるいは、極細サイズでぜんぜんユルユルだったか、どっちか」

花沢

「あ……、そ、そうなんだ……。そ、そうか……。確かに、こ——んなくらいのサイズだったかも」

※注) 親指と人差し指のわっかで表現中。

かおり

「小ささ」

早川

「さすがかおりちゃんね……。新島では顔を知らないヤツはいないって本当だったんだね」

かおり

「そうでもないよ」

花沢

「だけどさ……」

かおり

「だけど？」

花沢

「うん……。それがね、カツヲくんったら、舐めろとか言うのよ……。あんなオシッコが出る付近を舐めて、

拳句に喉の奥のほうまで突っ込まれるなんてあたし、耐えられない。だけど、それしないとディズニーシーに行かないって言うの……。あんなの舐めたら、黄色ブドウ球菌とか大腸菌とか

、

そーゆうのまで飲んじゃうことにならない?? 私は舐めるべきなの?? おしっこ臭くない??」

かおり

「オシッコ臭いはオシッコ臭いよね？」

早川

「よね? ってあたしに振らないでよー」

花沢

「かおりちゃん、それも経験あるの??」

かおり

「ったり前じゃん。うちの中学じゃあ、1年の夏休みに処女捨てるのが当たり前だったよ。ここ的高校の子はみんな遅れてるよ」

花沢

「そ……、そうなんだあ……」

かおり

「もしかして花沢さん、自分ススンでるう～、って、ちょっと思ったから、あたしらにそんな話したんじゃないの？」

花沢

「ちっ、違うよっ!! 本当に悩んでるのよっ!! だってあんなとこ舐めるなんてあり得ないじゃない」

かおり

「大丈夫だよ。舐めてみ？ どんだけくさいかわかるから」

早川

「やっぱくさいの??」

かおり

「洗い立てだったらそうでもないけど……。風呂に入ってから数時間経過してるとまあ、オシッコ臭いはしょーがないよね」

花沢

「だけどよくみたらなんか、皮つつうの?? 竿の本体がこうあるじゃない、ここの周囲をこんな風に（手のひらを使って再現中）、なんつうか、皮のたるみみたいなものが覆ってるじゃない。そこんところよく見るとカッターチーズみたいなのが溜まっててさ。それがむちゃくちゃ臭いのよ。むわっと来るの」

かおり

「カツヲって包茎なんじゃないの?? ちゃんとムケてる子だったら、そんなにチンカス溜まらないよ」

花沢

「ムケてる状態とムケてない状態っていうのがわかんないのよ……。どういふのがムケてて、どういふのがムケてないって見分ければいいの??」

かおり

「えーっとね、この指が本体だとすんじゃん??」

花沢

「うんうん」

かおり

「そうするとまあ、フニャフニャ時には全体的に本体がさあ、カメみたいに皮の中にもぐってるじゃん」

花沢

「うんうん」

早川

「……………」 ※注) 興味深々。

かおり

「んで、興奮するところ、によきって皮からかろうじて、頭だけ飛び出すのが仮性包茎な。いま一つ頭も抜け出せないのが真性包茎。正しいのは皮がちゃんと下までズレるっつうか、スライドするっつうか」

花沢

「んじゃあやっぱり、カツヲくんは仮性なのかも……。それにしてもかおりちゃんってすごいのね……。

そんなに経験豊富だと思わなかった」

かおり

「そうでもないよ」

花沢

「かおりちゃんが初体験のとき、一番驚いたことって何？」

かおり

「ん～、そうだなあ……。初めてだっつってんのに、勢いでシックスサインになっちゃってさあ……。

そのとき、男の股ぐらをしみじみ見たんだけど、男は股が割れてないのを知ってすんげえカルチャーショックだった」

早川

「え?? え?? え?? 股が割れてないってどういうこと??」

かおり

「いや、マジで割れてないんだよ股が。あれはホント、これは別の生物だと思ったわ。女ってホラ、尿方向から尻方向にかけて全体が割れてんじゃん」

早川

「うんうん!!」

かおり

「それが男はさ……。アレがあって、その下に袋がぶら下がってるわけだけど、袋の終着点は溝になってねえんだよ。フラットっつうか。女の窪みのところがさ。んで、5センチくらい平な感じで溝がなくなってると思うと、いきなり女と同じく割れ始めて尻方向へ延びるんだね。あれ見たとき絶対こいつら、おかしい生き物だと思ったよ」

早川

「初体験って……」

かおり

「まあ、こんなモン」

早川

「だ、暖炉のそばでキスとか、キャンドルの明かりに揺れる二人の影とか、手を握り合っちゃったりとか、終わったあとに感激の涙とか、その涙を優しく拭ってくれて腕枕とかそーゆう……」

かおり

「もうぜんっぜんっっっ！！！！！！」

「なんだかなーって感じ」

花沢

「うーん、確かに思い返すと、ちょっと、なんだかなーっていうのはあるかも」

早川

「あたしはイヤ。絶対暖炉のそばで、クリスマスイブに結ばれるの」

かおり

「んでそのあと“なんだかなー”だよ」

花沢

「そうそう。“なんだかなー”だよ」

早川

「いやああああああ！！！！」

(完)

第八夜 【企画のK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第八夜 【企画のK U Z U】

.....
※注) ここはとある居酒屋。

男A

「よお、ノリくんまたせたな」

男B

「おお、もっちゃん。暑いから先に飲んでた」

男A

「いいよいいよ。呼び出したのは俺のほうなんだし」

男B

「ところで、もっちゃんもようやく、再就職先が見つかったそうじゃないか。
やっぱあのときハローワーク行けて言って正解だったよ、うん」

男A

「ああ。ノリくんが強く言ってくれたおかげだ。ありがとうな」

男B

「ところで何の会社？」

男A

「出版社。編集の仕事」

男B

「すごいじゃないか。あのもっちゃんが編集者だなんて。なんて名前の出版社？」

男A

「増田米所出版」

男B

「ええ?? マスターベーション出版??？」

男A

「違う違う。よく間違えられるけど……。社長の名前が増田さんで、その昔精米所だった建物をオフィスにしているから、“増田米所出版”って名前なの。これでも発行部数11万部の“おめこジャーナル”を出してるんだぞ」

男B

「おこめジャーナルでしょ。あんたが間違えてどうする」

男A

「おおっと、そうだったそうだった」

※注) 男Aのもっちゃん、照れながら生ビールを飲み干す。

男A

「実はうちもさ、いつまでもおこめジャーナル一本ってわけにも行かないから、これからは書籍のほうにも力を入れて行こうってことになって、新入社員の俺にも、今度刊行する書籍を手伝って言うんだよ。それが増田米所出版が満を持して世に問う“自分ランキング”の本なんだけど」

男B

「自分ランキング？」

男A

「そう。世の中には本当は恵まれているくせに、自分はカワイソウアピールする自己憐憫人間ってたくさんいるだろ？」

男B

「ああ、ときどき出会うね、そういう人」

男A

「そういうヤツってスリッパでひっぱたきたくなるじゃない」

男B

「まあな」

男A

「そうかと思うと、誰もが羨むような人が実は、深刻な心の悩みを抱えていて自殺しちゃったりもするじゃない」

男B

「有名人とか、実業家とかね」

男A

「だから、自分が不幸に感じている事象、あるいは憧れていることは、日本人全体ランキングで何位くらいなのか示してやれば、よりものの見方に深みが出て、キモチを柔軟に切り替えることもできるのではないかと」

男B

「なるほど……。なかなか深いな、マスターベーション出版」

男A

「増田米所だって。ちなみにこのアイデア、専務の発案だけど……。んで、今日ノリくんを会社の費用で飲みに誘ったのは他でもない。俺が認める現実主義者であるノリくんは、幸・不幸についての意見を聞かせて欲しいんだ」

男B

「うーん、そう言われてもなあ～……。抽象的すぎてどっから手を付ければいいのかわからんな」

男A

「その辺は大丈夫だ。すでに質問を用意してきた。たとえば“宝くじで大金が当たった”は、ノリくん的には幸福度何位で、不幸度何位？」

男B

「そうか。幸福としてとらえた場合と、不幸としてとらえた場合の双方向から一つの事象を分析するということだな。そうすれば確かに視点に幅が出るもんな。慶事必ずしも幸福ならずってというのは、あるもんね」

男A

「そうなんだ。宝くじが当たるっていうのは確かに慶事だけど、それが元で親族争いになったり、人間不信になったりということがあるじゃないか」

男B

「うーん……。俺は正直、宝くじにはあんまり興味ないから、当たったとして、幸福ランキングは100位、不幸ランキングも100位くらいだな」

男A

「イーヴンということか」

男B

「ああ。なってみなけりゃわからない世界ってこと。当たったときに考えるしかないよね」

※注) 男Bのノリくん、ほっけとたこわざ、中生を追加オーダー。

男B

「だけど、宝くじの話みたいに、誰にでも起こるわけじゃないことを数えていってもさあ、幸・不幸が理解できるわけではないと思うんだよ」

男A

「どういうこと？」

男B

「たとえば俺さ、高校のときは軽音部でギター弾いてただろ」

男A

「うん」

男B

「んで、まあまあ上手かったりすると、山っ気が出て、チラリとプロになりたいな、なんて妙な気を起こしちゃうわけだけど」

男A

「B'Zの松本みたいになりたいな、とか、クラプトンみてえになりたいなとか」

男B

「そうそう。それで憧れちゃうわけよ、そういう人に」

男A

「だけど少年、現実には直面するわけだね。ああ、自分はクラプトンじゃないなって」

男B

「そうそう。んで、自分はなんで向こう側に行ける人間じゃないんだろうとか、自分の才能ってなんなんだとかって悩むんだけど、俺、あるときふっと考えたんだよ」

男A

「考えたって何をさ」

男B

「俺はクラプトンを神のように思っていた。思い過ぎて、ギタリストとしてああなることがすごいことだって、思い込み過ぎていたんだね。思い込み過ぎていたからこそ、そうなれない自分に余計落ち込むんだって」

男A

「うんうん」

男B

「でも、クラプトンを生身の人間、自分と同じような痛い、口クでもない人間と見たらどうなんだ？って、思ったの」

男A

「なるほど」

男B

「そうしたら俺、クラプトンの悲しみとか、苦しみなんかまるでわかってなかったじゃんってさ。気づいたんだよね」

男A

「俺らには想像できないけど、ああやってトップに上り詰めた人間には、想像を絶する孤独があるのかも知れないな。近寄るヤツらは全員、クラプトンのことをクラプトンとしてしか見ないだろうし。周囲から要求されるのはのびのびした裸の自分じゃなくて、単なるクラプトン役としての自分だからね」

男B

「うん。そう考えると、派手な人生＝幸福って言えるのかなって。マイケルが死んだのも、尾崎豊が死んだのも、自分で作りだした自己像を演じ続けるむなしさ故だったのかも知れないって。むしろ、ああいう、出続ける人生というのは、想像を絶する生き地獄の世界なのかなって」

男A

「そこに気づいたとき、ノリくんのブレイクスルーが生まれたわけだな」

男B

「そうなんだ。経営者とか、会社のエライ人たちも、そう考えるとみんなものすごく孤独な人たちだよ。名声が高まったぶんだけ、“自分”の役を演じ続けなくちゃならないわけだ。そう思えば俺は、出世なんか要らないってね。そう思ったらぜんぶ気がラクになった。それ以来、
、
仕事が逆に楽しくなってきたんだよ。地味でつまらない生産管理だけど……。その地味な仕事が、
、
なんて愛おしいんだろう、有難いんだろうって」

男A

「なるほど……。クラプトンには誰もがなれるわけじゃない。だが、缶詰工場の生産ラインで働く確率は、クラプトンになるより間口が広いわけだ」

男B

「そうなんだ。“缶詰工場”ってのは俺の場合だけど、“労働者”と捉えれば、人間のほとんどは単なる労働者じゃないか。その労働者としてのありふれた生活の中にこそ、幸福を見出していかないと、逆に何が不幸なことなのか見えなくなるのでは」

男A

「……じゃあ、例として宝くじを持ち出す時点で間違っている、ということね」

男B

「そういうことになるね」

男A

「でも世間は相変わらず、タレントのことを“セレブ”と言って持ち上げて、誰かがビジネスで成功したと言ってはニュースで取材し、誰かが早死にしちゃあカワイソウで済ませて、いつまでもグルメとファッションと美容とレジャーと健康だろ」

男B

「んで、そういうものを手に入れることが幸福なんだと刷り込まれていくわけだ」

男A

「じゃあ、不幸ってなんだ」

男B

「問題はむしろそこだな。究極の不幸とは果たしてなにか。それを明らめなければ議論は深まらない」

男A

「世間はだいたい、子どもが思いがけない事件・事故で死ぬとカワイソウがるよな」

男B

「そこなんだよ……。死を“忌むべきもの”と考えるから逆に、この世の真実が見えなくなるのではあるまいか。

どんなに科学が発達しようが、この世から死はなくならないわけだ。 被害者を愛する遺族だって、

殺した犯人だって必ず死ぬ。そう考えたときに、殺された人の無念は無念としてあるけど、それをめぐって罵り合いをしたところで、何の益があるだろうかという話。残された遺族の人生まで、

怒りや憎しみでボロボロにしてしまっているのかと」

男A

「んじゃあノリくんは、身内を惨殺されても犯人を赦すわけ？ 人が人を赦せる・赦せないっていう場合には

、少なからず相手に反省の態度を見せて欲しいとか、相手が泣いて土下座して詫びて欲しいとか、

まごころを態度で感じたいって言うのがあるじゃない」

男B

「そこなんだよ、大抵の人がつまづくのは。相手の誠意ってじゃあ、相手が何をしたときに信用できるわけ？」

男A

「そうだなあ……。犯人が泣きわめいたり土下座したり、反省文を書いたり」

男B

「それがウソかも知れなかったら?? 現に死刑になりたくないばかりに、その場は反省してるように見せかけながら、内心は全部人のせいにする殺人犯もいるだろ」

男A

「んじゃあどうしたらいいんだ」

男B

「無条件に信じるしかない、俺は思うね」

男A

「無条件に信じる？」

男B

「ああ。この犯人はどうしようもなく可哀想な人間なんだと。今まで生きて来て、人の情をかけらも感じられなかった痛ましい人間なんだと、その犯人の心の真実を信じるしかない」

男A

「さすがノリくん。深いな……。そんな大それた、一大哲学になるとは思わなかった。とてもじゃないけど、そんな深い話をされちゃうと言いつらいよ」

男B

「何が？」

男A

「この企画、専務が会社のカネを横領して、愛人と熱海で乱交パーティーして、さんざ楽しみまくった挙句に社長にバレそうになったから、帳簿上の穴埋め企画として始まったという事実」

男B

「そっちのほうが深いじゃねえか」

(完)

第九夜 【アイドルユニット“Blood (S)”結成前夜】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のKUZU」

第九夜 【アイドルユニット“Blood (S)”結成前夜】

.....
.

当てはまるほうに○をしてください。

Q、あなたは占いやおみくじを.....

A1、信じやすいほうだ A2、まったく信じない

Q、血液型によるタイプ分類は.....

A1、当たっていると思う A2、まったく信じない

.....
.

ヤス

「1次審査がダンス、二次審査が歌唱と来て、
三次審査がこんな妙な心理テストだと思わなかったな」

ケン

「ホントだね。何の意味があるんだろ」

ノブ

「やっぱアレだろ？ タレント性のある性格かどうかとか、
そういうのが見たいんじゃないのかな」

テル

「そうかなあ～.....。むしろ人間性とか、常識とか、
そういうのを見られているのかも知れないよ？」

ヤス

「しかし、三次審査に残されたのは俺たち4人だけか.....。
この中から、誰か一人を選ぶのかな」

ケン

「だとしたら、みんなとはここでお別れだな」

ノブ

「なんだかそれも寂しいな」

テル

「誰が選ばれても恨みっこなしだぞ」

※注) コンコン……、とノックの音。その場にいる全員が緊張で息を呑む。

ヤス

「き、来た……！！」

ケン

(受かりますように、受かりますように、受かりますように……)

ノブ

(なまんだぶ、なまんだぶ、なまんだぶ……)

テル

(お、お母さん！！)

※注) スーツ姿の男(ここの芸能プロの社長)が前に進み出る。

社長

「みなさんおめでとう。オーディションはユーたち4名、全員合格です」

一同

「ええ??!!」

社長

「ではさっそく、ユーたちの今後の芸能活動について説明します。
あんたたち4人は突然だけど、歌って踊れるアイドルユニット
“**Blood** (S) ~ブラッズ~”のメンバーとしてデビューしてもらおうかね」

テル

「“**Blood** (S) ~ブラッズ~” か……。エグザイルみたいでカッコいいじゃないか」

ヤス

「なんかいいな！」

ケン

「お～！！ テンション上がって来たあ～！！」

ノブ

「ミュージックステーション出れるかな！！」

社長

「ちなみにデビュー曲も決まってる」

ヤス

「ま、マジっすか！！」

テル

「スゲ～！！ さすがニャニーズ！！」

ノブ

「仕事が早いよ！！」

ケン

「どんな歌なのかな！！」

社長

「“Blood（S）～ブラッズ～”のデビュー曲は、昭和の昔に流行った
バラクーダの名曲、“演歌血液ガッタガタ”の平成カバーヴァージョンだ」

ヤス

「け、血液ガッタガタ？！」

ノブ

「鬼ダセエ！！」

ケン

「なにそれ～」

社長

「バカにするなお前ら。ちなみにカバー曲のアレンジはあのT、K（の予定）だぞ」

テル

「おお！！ あ、あのT、Kがっっ！！！！」

ノブ

「働く気になったのかとうとう」

ケン

「嫁の実家もキツいらしいからな」

社長

「それでだ。今日、ここに残ってもらった諸君4人は、
世界初の“血液型ユニット”として売り出すことにした。ヤス」

ヤス

「は、はいっ！！」

社長

「お前さん血液型は？」

ヤス

「はいっ！！　じ、自分はOっス！！」

社長

「ノブ、ユーは？」

ノブ

「はいっ、俺はBです！！」

社長

「そう……。そしてAのケン、ABのテル……。実はユーたちは、4人全員血液型が違うのよ。
そしてユーたちは今日から、ダンスレッスン、ボーカルレッスンはもちろんのこと、
“血液型エリート”として、それぞれの血液型の典型的な仕草、ふるまいを
身につけてもらうからね」

ケン

「それぞれの血液型の、典型的な仕草や、ふるまい……？」

テル

「どういうことだ??」

社長

「難しく考えないで。要するに自分の言動はO型らしいか、らしくないか。
B型らしいか、らしくないか。常にそれを考えながら生活しなさいってことよ。たとえばケン」

ケン

「は、はいっ……！」

社長

「ユーはA型だから、神経質よね」

ケン

「は、はあ……。そうでもないっすけど」

社長

「アンタは、トイレでうんこしたらお尻を100回拭かなきゃダメ」

ケン

「えー！！！」

社長

「逆にヤス」

ヤス

「はい」

社長

「ユーはおおざっぱなO型だから、うんこしてもお尻は拭かない」

ヤス

「え————！！！！」

社長

「世間はね、Oはおおざっぱって信じていたいのよ。夢を壊されたくないの。
O型は肛門についたうんこなんか気にしちゃダメなのよ。おおざっぱなんだから」

ノブ

「んじゃあ社長、うんこしたあと手を洗うのはどうですか？ 当然、神経質なAのケンは……」

社長

「もちろん10回は洗う。仕上げに紫外線消毒&アルコール消毒。そしてマイソープをどこでも持参」

ケン

「めんどくせー」

テル

「ヤスはどうしたらいいんだ」

社長

「ヤスはもちろん洗わない。だってOだから。Oは細菌なんて細かいこと気にしちゃダメ。だっておおざっぱなんだもん」

ヤス

「……、お、O型はキツイな……」

ノブ

「気にすんなよヤス。今までお前ら、甘やかされ過ぎて来たんだよ。O型が一番素晴らしい血液型だ神話はもはや崩れた。これからは俺の時代だ」

テル

「おお！！ Bのノブが宣戦布告だ！！」

ノブ

「だってそうだろ？？ テル！！ だいたいむちゃくちゃひどいこと書かれているのは、俺らマイノリティのB&ABじゃないか！！ なんだよ、B型の“マイペース”って！！ 広いにもホドがあんだろ！！ マイペースで生きてない人間なんかいるのかよ！！」

テル

「んなこと言ったら俺だってなんだよ、“二重人格”って！！ お前ら、俺の何を知って二重人格呼ばわりだゴルァ！！」

ケン

「誰に言ってんだBのノブ、ABのテル」

ノブ

「世間にだよ」

テル

「そうだよ、世間にだよ」

ケン

「んなこと言ったらAもキツイぞ……。なまじっか“神経質”呼ばわりだから、掃除とか雑務とかするのが当たり前って空気感出されてよお～……。バカ女とか、“なんでケンちゃんAなのに掃除しないのお～？”とか言われるんだぜ？？ 俺はけっこうだらしなないっちゅーの」

ヤス

「Oだってラクじゃないよ……。俺だってたまにはウツになるし、暗い気分のあるときに、Oだったら社交的だよね呼ばわりされてよお～……。O型の血液型診断とか見てるとけっこうバカっぽい、薄っぺらい性格じゃないか。Oの俺らにはそんじゃあ、悩みとかあっちゃいけねえのかよって。
人見知りしちゃあいけねえのかよって」

ノブ
「いいや！！ Bの俺らが今まで受けてきた血液型ハラスメントの歴史に比べれば、お前らなんかいいほうだ。Bはマジキツイぞ。奇人変人キチがい呼ばわりだから、ちょっとの失敗をものすごく大きく思われてさ……。失敗しない人間なんかどこにも居ないだろ」

テル
「結局、血液型ってアレだよな。単なるレッテル貼り。悪趣味だよ」

ヤス
「そうだな。血液型なんかで人を決めつけるのは最低だな」

ケン
「そうだよ。血液型なんか関係ないよ。人間なんだもん。
与えられたスペックはそう変わるもんじゃない。生まれ育った環境や、教育のほうがずっと大事だよ」

ノブ
「そうだよ。血液型診断なんてないほうが、世の中すがすがしいよ」

社長
「うーん、やっぱそういう結論??？」

一同
「ですねえ～……。どうしたらいいんでしょう？」

社長
「大丈夫。そんなこともあろうかと、強力なコーチを呼んである。先生、お願いします」

※注) 変な黒いヴェールをかぶった、怪しい女登場。

一同
「誰ですかこの人」

社長

「占いを研究し続けて20年。フェリシア・M・カサンドラ先生だ」

テル

「なんだよ、占い師かよ」

占い師

「占い師“かよ”って今、言いましたねあなた」

テル

「うん」

占い師

「ダメです。AB型として失格です」

テル

「なんで」

占い師

「AB型はロマンチストなんだから、占い大好きじゃなきゃダメ。

もっと目をキラキラさせて、“え〜?! すっごーい!! ボクも観てくださいよ〜”

くらい言わないと、世間をがっかりさせるよ」

ノブ

「世間?? 世間ってなんだよ」

占い師

「お〜、さすがBのノブ。そうそう。やっぱそーゆうのは、Bのノブが言いださなくちゃ。

んで、周囲をどん引きさせて一人浮くのがBらしい人生」

ノブ

「だから決めつけんなって!! なんだよ、俺には賛同者が誰もいないみたいな論調にしゃがって……。そういうのがレッテル貼りなんだよバーカ」

占い師

「お〜!! 出た! 人に面と向かってバカ発言!! それでこそBのノブ。

いいねえ〜!! なんだかんだで一番己の血液型を心得ているのはノブじゃないの」

ノブ

「心得てねえよババア」

ケン

「よせよノブ。ババアの術中にハマってる。
お前が反抗すればするほどB型らしいってことにされるぞ」

ノブ
「くっそう、どうしたらいいんだ」

テル
「やっぱ大人しそうなイメージの、A型のケンがマジ切れすればいいんじゃないのか」

ケン
「やっぱりそれしかないか……。よし、わかった。やいやいクソババア」

占い師
「あー、A型が怒ったよ。A型はいったん怒るとしつこいよ。
根に持つよ。真面目でギャグが通じないから」

ケン
「……マジでブツ殺したくなってきたこのババア」

ノブ
「押さえるケン。ここでババアをやっちまったら、だからA型はマジ切れさせると
怖いっていうことになって、結局は全部血液型のせいにされちまう」

ケン
「なら、テル行けよ」

ノブ
「だめだケン。テルはA B型だ。血液業界ではA Bといえば、
精神異常の変質者と相場が決まっている。結局はA Bも
変質者なんだからカッとなりやすいんだって論調にされるぞ」

テル
「血液一つでそこまで決めるか……。世間のヤツらは……」

テル
「そうだ、だったら、ヤスならいいんじゃないのか」

ヤス
「ええ?? 俺??」

テル

「ああ。けっきょく世間はO型が好きだ。血液業界ではO型のやることは何でも美化される。俺らがなんかするとネガティブな言葉で表現されるのに、O型は怒ってもあっさりしてるとか、根に持たないとか、親分肌だから相手のためを思って叱っていると、そういう評価になっちゃう。

お前ならババアも強くは言えんのじゃないか」

ヤス

「うーん……、試してみるか。やいやい、このクソババア」

占い師

「ヤダあ〜、温厚なO型に怒られちゃったら謝るしかないわ。ごめんね、あたしも言い過ぎた」

テル

「スゲーな、O型神話。ホントに引っ込みやがったぞクソババア」

ケン

「世間はホント、O型好きだよな。ヤなヤツもいっぱいいるのに」

ノブ

「そうそう。ヤなヤツもいるのにな。まあ、そりゃあ、どの血液型もそうだけど」

テル

「ここまでO型賛美だと、腹が立ってくるな」

ヤス

「しょうがないじゃないか。俺だって好きでO型なんじゃねえよ」

社長

「そんなわけでこれから、この占い師に、“血液型レッスン”をしてもらおうかね」

テル

「うーん……、社長、ちょっといいですか」

社長

「なんだABのテル」

テル

「いっそみんな、他の血液型になってみるって言うのはどうでしょう」

社長

「他の血液型??」

ノブ

「そうだ。それいいアイディア。自分のホントの血液型だと思えば、
レッテル貼りみたいで腹が立つから、他の人の血液型を演じるほうが気がラク」

ヤス

「そうだよ。どうせ夢を売る商売なんだから、タレントとして
役柄を演じ切るほうが気がラクだし、やりやすい」

テル

「そうだよ」

ケン

「でも、O型担当になったら、ケツ拭いちゃいけねえんだぜ??」

ノブ

「それはイヤだ」

テル

「そこはアレ、“O型はおおざっぱだけど、1回くらいはケツ拭く。
でも神経質なA型より少ない”という定義にしてはどうか」

ケン

「そうするとフツーじゃねえか。没个性的になって、逆に今度は神経質の
A型役がしんどくなるぞ？ しかもだ。A型役は間違いなく一番嫌われるのは確実」

ノブ

「なんで」

ケン

「神経質を際立たせてみる。単なるヤなヤツにしかならねえぞ」

テル

「確かにな……。いちいち人の欠点ばかりを気にしなくちゃならないわけだ。
お姑さんみたいなイヤな役になるのは間違いない」

ケン

「Aだからってみんながみんな、小姑みたいだと思うなよって」

ノブ

「だから血液型なんてレッテル貼りなんだよ」

ヤス

「確かにな。血液型なんかで人を決めつけちゃいけないよ」

テル

「そうだそうだ」

社長

「……またしてもそういう結論か」

一同

「……どうしてもそうなっちゃいますねえ～」

社長

「困った。長くなりそうなのでまた続けてことで」

占い師

「なんで世間は占いが嫌いなのかしらねえ。人を決めつけるって楽しいのに」

一同

「だからそこがイヤなんだよババア」

社長

「っだー！！ 堂々めぐりだからいったん終了！！」

アイドルユニット“**Blood**（S）～ブラッズ～”、このあとどうなる？！

NEXTを待て！！！！

第十夜 【その後の自己主張のK U Z U】

感動、さわやか、そして愛。 短編シリーズ「人間のK U Z U」

第十夜 【その後の自己主張のK U Z U】

※第四夜、「自己主張のK U Z U」の続きです。

.....

※注) A子宅での取材が終わって

A子

「はあ～.....」

スタッフ

「どうしましたA子さん」

A子

「やっぱりダメですよねえ～.....。こんな生活.....」

スタッフ

「うーん」

A子

「正直、私のこと、どう思いますか」

スタッフ

「ええ？そ、そりゃあ、まあ.....、お辛そう、というか、大変そうというか.....」

A子

「ウソよ。正直に答えて。本当は甘えてんじゃねえよクソ女って思ってるでしょ」

スタッフ

「そ、そんな.....」

A子

「みんななんでそうなの。なんであたしのことバカにするの」

スタッフ

「んじゃあ、A子さんは、周囲の人がどうA子さんと接すればいいと思うんですか？」

A子

「そうねえ～.....」

※注) 以下、A子の妄想の世界。

とあるスーパーにて

.....

.

A子

「なんでこの箱入りカップラーメンが880円なのよ。
今朝のチラシでは650円ってなってたじゃない」

レジ

「すみません、それはタイムセールの商品で……。
3時でタイムセールは終わっちゃってるんです」

A子

「それじゃあ困るわ。まだ生活費の支給日まで10日もあるのよ。
8食入り650円のカップめんならどうにかなると思ったのに」

※注) 急に、A子の後ろに並んでいた30代くらいの女性が、A子を覗き込んだ。

女性

「あの……。もしや、生活保護受給者のA子さんじゃないですか？」

A子

「だったら何なのよ」

女性

「わああ～。こんなところでお会いできるなんてっ！！ ちょっと待って、婆ちゃん、婆ちゃん！！」

女性の連れの老婆

「なんだいみつ子さん」

女性

「婆ちゃん、ホラ、この人、A子だよ、生活保護の！！」

※注) びっくりした顔の老婆。目に涙を浮かべる。

老婆

「なまんだぶ、なまんだぶ……。な、長生きはするもんじゃ……。
こんなところで生保のA子に会えるだなんてなあ……」

女性

「よかったね婆ちゃん！！」

レジ

「え…?? あなた本当に、生保のA子さん??」

A子

「だから何よ」

レジ

「わああ！！ ご本人だわ！！ 気づかないなんてあたしのバカッ！！
A子さんなら、このカップめんタダで差し上げます！！ あとでサインしてくださいっ！！」

A子

「まあいいけど……。それじゃあ帰るわ。そこどいて」

※注) スーパー中にはすでに、A子が来ている情報が知れ渡り、店内大混乱。

お客a

「A子が来てるって本当??」

お客b

「マジ??」

お客c

「ウソー!! サイン欲しい~!!」

お客d

「A子歌ってえええ~!!」

お客e

「そうだそうだ!! A子歌ってよっ!!」

※注) 一同A子コールの大合唱

「A子っ、A子っ、A子っ、A子っ、A子っ、A子っ」

店長

「なんだこの騒ぎは」

レジ

「ああ店長!! すごいんですよ、こんな田舎のスーパーに、あの生保のA子が来たんですっ!!」

店長

「なにっ? それは本当かっ!! さっそく駐車場に特設ステージを作ってA子に歌ってもらおう!!」

レジ

「そうですね店長!! みなさん!! せっかくなので駐車場のほうに特設ステージを設けます。A子に今からそこで歌ってもらいます!! A子との撮影はあとで撮影券・握手券を先着100名にお配りしますから、係員の誘導に従ってください!!」

A子

「困ったわ。今日はカップラーメン買いに来ただけなんだけど……。でも、仕方がないか。そんなにあたしの歌が聞きたいのなら、歌ってあげる。あたしの歌でみんなが癒されれば嬉しいもの」

店長

「さすがA子だ。器が違うねえ!!」

A子

「みんな、こんな場所じゃあマメカラしかないけど、カラオケでもいいのかしら」

一同

「もちろんだよ！ カラオケでじゅうぶんだよ。A子が歌うなら！」

A子

「なんの歌がいいの？」

一同

「プリンセス・プリンセスとか、ブルーハーツとか」

A子

「なによ……。私と同世代なのねあんたたち……。いいわ。
バック・トゥ・ザ1989。あのころ、私たちバンドブームでした。
文化祭のステージでボーカルやってみたかったすべての40代へ、
この歌を送ります。“リングダリングダ”」

一同

「イエ～イ！！ リングダリングダ～！！」

A子

「リングダリングダ～！！」

※注）飛び跳ねるA子。そんな感じで特設ステージで歌ったA子の歌が、
たまたま通りかかったアメリカ音楽業界の有力プロデューサーの目に止まる。

A子

「ええ？？ 私が全米デビュー??」

通訳

「そうです。ミスター・ショーンはこう言っています。“A子の歌は素晴らしい。
A子の声はまるで天使の声だ。10万人に一人の才能だ”と。
ぜひアメリカで本格的にレッスンさせたいと申しております」

A子

「んで、それがきっかけで全米デビューを果たして、3年後にグラミー賞の
最優秀音楽賞を受賞するの。んで、受賞インタビューのマイクで……」

スタッフ

「私を支えてくれたのは、あの辛い生保の日々でしたと、トロフィー片手に自叙伝を語ると」

A子

「そうそう。そういう感じ」

スタッフ

「ちょっといいですか」

※注) いいつつ、後ろで取材の後片付けをしている他のスタッフを振り返る。

スタッフ

「おーい、今日の取材チームの中で誰か、M I 6でダブルオーナンバーもらってる人っていない??」

他スタッフ

「あ、すいません。俺も今、話聞きながら殺人許可書探しましたが、みつかりませんでした」

スタッフ

「どうしたらいいんだろうねえ」

A子の娘

「おじさん、一応はこんなヤツでもあたしのお母さんだから。これで赦してあげて」

スタッフ

「スリッパか……。いいのかいお嬢ちゃん。おじさんがママをひっぱたいても」

娘

「うん!! 思いつきりひっぱたいていいよ!!」

※注) その後、この都営アパートには、
小気味よい破裂音が響いたという。

(完)

読了ありがとうございました。

続きはシリーズ「人間のK U Z U」 第二集にて。

現在鋭意執筆中!!

またのUPをお楽しみに☆